

イラク－イマーム・フセイン会議 2015

Saori KATAGIRI

はじめに

2015年12月7日と8日にわたり、バグダードのムスタンスィリーヤ大学で「イマーム・フセインとカルバラの悲劇」に関する国際会議が開催されました。幸運なことに、私はこの会議に出席する機会に恵まれました。情報が古くて恐縮なのですが、その時のことを思い出しつつ、当時の現地の様子を述べさせていただきますと思います。

「日本におけるカルバラの悲劇」

ムスタンスィリーヤ大学は、バグダード大学に次ぐイラクの国立大学です。会議出席のきっかけは、この大学から私の所属するNPOに招聘があったことでした。ただし招聘の条件として「日本におけるカルバラの悲劇」に関して論文を書き提出することが求められました。

しかしこのお題を論じる以前に、一般の日本人にとってイマーム・フセインはあまりにも知名度が低く、またシーア派の重要な聖地カルバラがイランではなく、イラクにあること、更には「カルバラ」の地名すらあまり知られていない状況です。そこで私は、データを挙げながらその点を書き提出したところ、幸いにも論文が通りイラクへ行けることになりました。

実は招聘のメインは私の恩師の先生であり、私はオマケだったのですが、ある事情から急遽私が先に渡航し、恩師は後からイラク入りするということになりました。(余談ですが、恩師は結局のところ渡航が叶わなくなり、私の単独参加となってしまいました。)

初めてのイラクに独りで渡航というわけで、恐る恐る入国したのですが、大学関係の方々がバグダード国際空港まで出迎えに来てくださり、他の招聘された先生方が宿泊しているホテルまで送っていただきました。その先生方というのは、レバノンやイラン、モロッコなど周辺国のドクターたちでした。

会議初日 (12月7日)

翌日12月7日の会議の初日、宿泊先のホテルに送迎車が到着し、私たちは軍の車に先導されながらムスタンスィリーヤ大学へ向かいました。大学の周辺の家々の壁には、イマーム・フセインを讃える言葉が書かれています。大学は広い中庭を持つ開放的なキャンパスで、女子学生も多く、ヒジャーブを被っていない生徒の姿もちらほら見受けられました。

基調講演の会場はかなり広く、大勢の人が詰めかけ凄く熱気です。イマーム・フセイン



イマーム・フセイン会議のチラシ

を讃えるビデオが流され、登壇者の講演中に、客席から飛び入りで祖国を思う詩を吟じる人もいました。

基調講演の後には、イマーム・フセインの殉教にからめた劇が上演されました。当時のイラクの状況をカルバラの悲劇に重ねた劇です。冒頭では虐殺され生首を晒されたイマーム・フセインの一族たちが描かれます。そして時は現代に移り、主人公のイラク人男性が年老いた両親と妻子を残し IS との戦いへと向かいます。家族は悲しみに暮れながらも彼を誇りに思い、戦場へと送り出します。しかし主人公は銃弾に倒れ、息子の少年が父親の遺志を継ぐことを誓うという結末でした。

カーディミーヤ参詣

初日の会議の終了後、私たち招聘客はバグダード郊外のカーディミーヤに参詣することになりました。カーディミーヤには第7代イマームのムーサー・カーズィム（799年没）と第9代イマームのムハンマド・ジャヴァード（835年没）、つまりイランのマシュハドの第8代イマームのアリー・レザー（818年没）の父と息子が葬られています。廟は美しい電飾に彩られ、通りはまるで浅草の仲見世通りのような賑わいです。家族連れの姿も目立ちます。廟内は沢山の参拝者で押すな押すなの大混雑で、廟に近づくこともままならないほどです。女性は私一人だったのでドクターたちと離れての参拝となったのですが、モスクの係員の方々がとても親切だったので、不安を感じることもありませんでした。

会議2日目（12月8日）

会議2日目には、様々な講演が複数の教室において同時進行で行われました。「後ウマイヤ朝におけるイマーム・フセインの影響について」など、多くの興味深い講演があったようです。実はこの日は、恩師の講演予定日でもありました。ところが恩師は未だ到着せず、知らないうちに私も登壇者の一人とされておりまして。このことを私が知ったのは前日の夜。急な予定変更は中東ではよくあることですが、慌ててしまいました。幸い、招聘者のうち東洋人かつ女性は私一人という物珍しさから、聞きに来てくださった方は多かったのですが、日本におけるイマーム・フセインの知名度の低さに非常に驚いた様子でした。

ナジャフのモスク

すべての講演が終わり、招聘者一行および大学関係者は、カルバラへの二泊三日の小旅行に行くことになりました。この旅行は、ナジャフ、クーフア、カルバラ在住の各関係者への会議の報告を兼ねていたようです。

ナジャフではイマーム・アリーが葬られているイマーム・アリー・モスクを参詣しました。モスクで



は男性の一団が踊りを奉納し、またあちらこちらで参詣者が「挨拶の章句」を読み上げる声が響きます。ナジャフも賑やかな電飾や夜店にあふれ、家族連れの様子が目立ちました。

クーファとカルバラ



翌日の12月9日は朝のうちに、まずクーファにあるイマーム・アリーが住んでいたという家に向かいました。ここは史跡であると同時に参詣地でもあり、一般の人は家の前の柵の所で参拝するらしいのですが、私たちは特別に柵の内部まで見学することができました。書籍でしか知ることのなかったイマーム・アリーが、実際にここに住んでいたのだと思うと感慨深いものがありました。また道々、非常に多くの参詣者

を見かけました。特に男性の先導者に率いられた女性の一団が目立ちます。細い帯状のものを付けたアバーヤをまとっているのも、何だか日本の平安時代の女性の旅装、つぼ装束に桂の姿を思わせます。また道のあちらこちらでは、参詣者に無料で飲食を提供する人々の姿が見られました。上の写真はその一例ですが、緑の揺りかごを模したものが置かれています。カルバラで亡くなった赤ちゃん、アリー・アスガルへの追悼を示しているのでしょう。

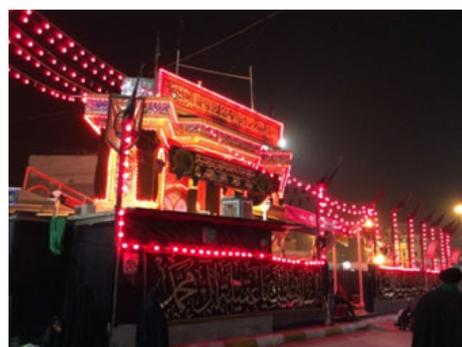
クーファのモスクも大変に華やかな所で、参詣者に溢れかえっていました。このモスクはイマーム・アリーが早朝に礼拝していた際に、頭を切り付けられ暗殺された場所とされています。イブン・シーナも学んだというこのモスクには、各国語に堪能なガイドが常駐しており、各地からの参詣者に詳しく説明してくれます。(残念ながら日本語ガイドはいませんでした。)



クーファのモスク内部

またここには、ムスリム・ブン・アキール・イブン・アブー・ターリブとハーニー・ブン・ウルワー、そしてムフタール・サカフィーの三人も葬られているとのこと。

次はいよいよカルバラの参詣です。カルバラには夜遅くに着いたのですが、ここもまた非常に華やかな場所でした。知らない人が見たら、遊園地だと誤解してしまうかも知れません。豪華なホテルが立ち並び、スークには店が連なり、夜遅くまで参詣者で



カルバラ

販っています。土産物屋にはカルバラの土を練りこんだというトゥブ（折り石）をはじめ、様々なグッズが売られています。そしてこの寒さの中、廟の前で毛布を被り眠る多くの参詣者の姿がありました。やはりここは、まごうことなき聖地なのです。

翌日は朝からカルバラの参詣でした。集団礼拝ではアジア系、湾岸系など実に様々な国の人々の姿が見られます。またイマーム・フセインの弟、アッバースの廟には革袋の絵が描かれており、すぐにそれと知ることができました。喉の渇きに苦しむ一族のために水を届けようとして、壮絶な最期を遂げたあの場面が思い起こされます。カルバラでは様々な施設がワクフによって運営されており、無料のレストランもあります。また付属の図書室には、神学のみならず様々な分野の本が揃っていました。

こうしてカルバラ参詣は終わりました。私たちはバグダードへの帰路につき、途中ヒッラを通過しました。ヒッラは山形国際ドキュメンタリー映画祭で上演された『イラク零年』にも登場した街です。残念ながら車を降りることはできませんでしたが、街の周囲には美しい田園風景が広がっていたことでしょう。



カルバラの図書室

バグダードにて

12月10日夜、私たちはバグダードに帰着しました。会議関連の催しは、これで全て終了です。最後に夕食を摂りに、皆で郊外のピザハウスに行くことになりました。車窓から見える街の様子は、所々検問所があるものの平穏な感じです。クリスマスのディスプレイが飾られたお店もありました。

清潔で広いピザハウスは家族連れで満席でした。ストーブの周りで子どもたちが遊んでいます。そういえば会議初日、カーディミーヤの参詣の帰りにフライドチキン店で夕食を摂ったのですが、深夜だったにも関わらず危険な雰囲気はありませんでした。和気あいあいと、会話が弾みます。私はドクターたちに「日本では神道の教徒と仏教徒では、どちらが多いのか?」「病気になったら、お坊さんを病院に呼んで祈ってもらうのか?」などと訊かれ、答えに窮してしまいました。

バグダードでは、会議に出席する以外、私はほぼホテルに缶詰状態だったのですが、嬉しい出会いもありました。日本の恩師の紹介で、イラクの児童文学作家の先生にお会いすることができたのです。この先生は子ども向けに、古事記のアラビア語訳絵本も出版しておられます。とても気さくな方で、「子どもにとってお話は不可欠」と、日本の図書館用にご著書を寄贈してくださいました。それらの本は帰国後、国際子ども図書館にお届けしました。

また私は日本の昔話の紙芝居を作り、アラビア語で演じるという活動を行っているのですが、たまたま持参していた紙芝居をホテルでこっそり演じる機会を得ました。大学の先生が急遽ご自分のお子さんたちをホテルに呼び寄せ、一緒に楽しんでくださったのがとて

も嬉しかったです。紙芝居は日本特有の文化であり、今や「KAMISHIBAI」の名で世界に広がっているのですが、イラクではまだ知られていなかったようです。この日演じた紙芝居は、後にアラビア語と日本語のバイリンガル版をつくり、イラクで活動している NPO の方にお届けすることになりました。

帰国便は 12 月 11 日の夜の便でしたので、それまでホテルのレストランで大学の先生と話をして過ごしていたところ、突然見知らぬ男性に話しかけられました。聞けばシリアの方で、家族でシリアから逃れ、現在はトルコで暮らしているとのこと。イラクには仕事で来ているとのことでしたが、その場に居たモロッコのドクターたちも話に加わり盛り上がりました。ドクターたちは、トルコで暮らすシリア難民の多さとトルコの物価の高さを聞き、とても驚いていたようです。

後日談

こうしてイマーム・フセイン会議と一連の催しが終わり、私は無事に帰国したわけですが、後日譚があります。アル=フセイン聖廟事務局カルバラ研究調査センターの依頼で、『アル=フセイン革命 -ムスリム社会の意識への衝撃-』（ムハンマド・M・シャムス・アル=ディーン著 初版 2015 年）を所属 NPO で翻訳出版することになったのです。この本は NPO のメンバーによって共同翻訳され、2016 年に出版されましたが、ムスリム向けに周知であることを前提として書かれているために翻訳には骨が折れました。例えばカルバラの戦いに参加した人たちの名が列挙されているのですが、敵味方の人間関係がわからず悩みました。とはいえ、この翻訳を通し、私はますますカルバラの悲劇に関心を持つようになり、後日イランまでアーシューラーの哀悼儀礼を見に行ってしまうました。またイマーム・フセインだけでなく、イマーム・アリーや敵側となったムアーウィアの人間像にも惹きつけられます。不謹慎かもしれませんが、日本で言うなら NHK の「ザ・プロファイラー 英雄たちの選択」のような番組や、歴史的客観的事実を踏まえた歴史小説などがあれば、ぜひ見たいと思っています。

終わりに

この会議への出席が叶い、またイラクで私が何の不安もなく過ごすことができたのは、ひとえに日本の恩師、主催者であるムスタンスィリーヤ大学側の細やかなフォロー、イラクの方々のホスピタリティー、そして他の招聘されたドクターたちのご配慮のおかげです。改めて感謝の意を捧げます。またこの稿には私の知識不足から、用語の誤りや誤解などがあるかもしれません。ご指摘ご教授いただければ、誠に幸いに存じます。最後に私の個人的な事情から、個人が特定される表記を避けたこととお詫びして、この稿を閉じさせていただきます。

(掲載写真はすべて 2015 年当時に筆者が撮影したものです。)